
<ゆめにつき二次創作> さいごの2ページ

ostrich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

> ゆめにつき二次創作 < さいごの2ページ

【Nコード】

N6459Q

【作者名】

ostrich

【あらすじ】

窓付きの日記さいごの2ページ。

月 日 曜日 曇り

また夢を見ました。いつもと同じ夢を。今日は、二人の人に会ってきました。

一人目は、人と数えていいのかちょっと分かりません。でも、わたしは彼を人だと思ふことにします。彼は、この星ではないどこか別のところ、その赤茶けた土の下にいました。あの星は色合いとは裏腹にずいぶん冷え冷えとしていたのだけれど、彼がいるところは一層冷たい空気に覆われていました。長い階段を下って、何か機械のようなものが散らばっているところに出たのです。でもそれは多分廃墟で、少なくともわたしを訪れた時には寂しい金属の塊だったのだと思います。わたしがしばらく歩いていると、手の甲が濡れるのを感じました。思わず上を見ると、大きな眼があつたのです。それは心臓のような輝きを持った眼で、生命を感じさせる様子で光っていました。眼だけではありません。彼の身体全てが美しく深い光を持っていました。彼は一つ眼で、体から直接一本だけの足が生えていて、わたしよりも大分背が高かった。身体は周囲に溶け込むような濃い青色でした。

反射的に、わたしは彼を包丁で刺してしまいました。今までこの夢の中でやってきたのと同様に。怖いのです。この夢で出逢うものすべてが。

ゆっくりと目を開けると意外な光景が広がっていました。彼は、消えていなかったのです。今までわたしがこうやって刺してきたものは皆すぐに消えてしまったのに。足に確かな刺し傷が残っていて、そこから赤い血が流れていました。

そんなとき、ようやくわたしは気付いたのです。彼が泣いているということに。痛いからじゃない。何で泣いているかは分からないし、涙を止ませることも出来ない。彼はただ泣いているのです。こ

の寂しい夢の底で、美しい涙を流しているのです。変な感じだけど、わたしはそんな彼を綺麗だと思いました。そして、ただ抱きしめることしか出来なかった。でもそのとき思っただんです。ああ、わたしはずっとこうしたかったんだって。傷つけたいわけじゃない。ただ、抱きしめたかっただけなのだと。

どこか、懐かしい感じがしました。

これが一人目でした。

もう一人は、既に会ったことがある人でした。さっきの邂逅のあと、わたしが自分の意思で会いにいったのです。何だか合わなくてはならない気がして。彼女は金髪のポニーテールが良く似合う女の子でした。この現実離れた夢の風景の中で、極めて女の子らしい部屋に住んでいます。初めて逢った時、とても優しい笑顔を向けてくれたと憶えています。でも、あれはわたしが悪かった。何度も何度も彼女の部屋に出入りして、ついに彼女が恐ろしい化け物の姿でいるところを見てしまったのです。今になって思うのは、あの化け物は私自身なのだという事。完全に綺麗だけの人間なんていません。分かっていたはずなのに、わたしは彼女にそれを求めました。千回わたしが彼女の部屋に出入りしたのならば、千回優しいままでいてほしかったのです。もちろんそれは無理なことでした。そんなことを求めるわたしの心は汚かった。だから、謝ろうと思ったのです。

何でそんなことを考えるに至ったかという事、さっきの出来事が影響していると思うのです。涙を流している彼をわたしは綺麗だと思った。そして、抱きしめることが出来た。何か、分かった気がするのです。

実際その日の彼女も優しい笑顔で迎えてくれた。でもどうしてもわたしは弱いようで、あの化け物の姿がちらついて離れません。歩み寄ろうとしても、足が動かないのです。彼女は待つ以上のことはいらない。わたしが踏み出さなければならぬのです。

彼についた傷痕は消えなかった。でも、彼は怯えて襲いかかって

くることなどせずに、ただ黙って涙を落していた。

「」

わたしはひとつの名を口にしました。

ああ、そうか。

わたしはどこか別のところで彼女のことを知っていた。

彼女の笑顔は言っています。ここにいてもしょうがないでしょうと。

ようやく、わたしにも決心が付きました。あの扉を開けてみようと思ったのです。この夢の中で唯一開けていない、わたしの部屋にあったのと同じ扉を。

そうしてその扉を開けると、やはりその向こう側は恐ろしかった。赤い、不気味な人がいた。でも、わたしはその先に進みたいと思った。

気づけばわたしは現実にいました。それは目覚めというよりは、あの扉をくぐってこちらに来たのだと考えた方がいいのかもしれないません。

まだ肌に夢の中の感覚が残っていました。

月 日 曜日 晴れ

またあの夢を見ました。そして多分、もう二度と同じ夢を見ることはないでしょう。

不思議な夢でした。夢の中で手に入れたものを一つ一つ捨てていくのです。いや、捨てるという言い方は相応しくないかもしれせん。どちらかというと、一つ一つ大事に置いてきました。

どんな形にしろ、この夢には別れを告げなければならないと思ったのです。

二月一日 月曜日 晴れ

ベランダに出て、台に上ると色々なものが見えました。
空。

太陽。

鳥。

ビル。

道。

友達。

ここはずいぶん高いところだけど、はっきりと分かりました。ポ
ニテールの女の子がこちらに向かって手を振っているのです。

「
わたしの名を呼びながら。」

わたしも、あなたの名を呼んだ。

わたしは台から下りて、部屋に戻りました。扉を開けるのです。
扉の向こうにはまた怖い世界が広がっているのかもしれない。で
も、そうだとしても、わたしには愛することが出来るのです。怒る
でもなく怯えるでもなく、ただ黙って涙を流すことが出来るのです。
扉を開けました。
光が差し込んできました。

さようならわたしの夢。

（後書き）

いくつかのイベントに関しての解釈と、歪曲したハッピーエンド。
原作のラストはあんまりだと思ったので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6459q/>

<ゆめにつき二次創作> さいごの2ページ

2011年2月4日21時55分発行